



吉野皇居

吉水神社
家内御守護

後醍醐天皇御製歌

たけふゆき
あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ



後醍醐天皇玉座



北
關
門

書
院

楠
公
祠

本
社

弁
慶
力
釘

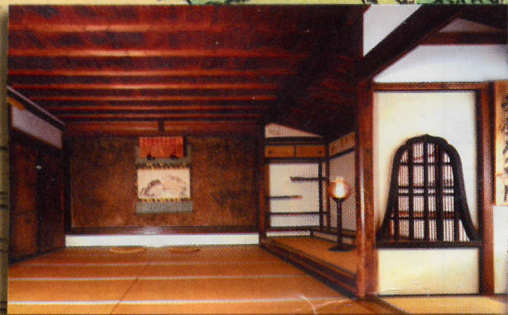
義
經
馬
蹄
跡

籐
竹

義
經
コ
マ
ツ
ナ
ギ
松

一
目
千
本

色々威腹巻(源義経着用)
(重文・鎌倉)



義経・静御前潜居の間

江戸時代の吉水院絵図

吉野山

よしみず

吉水神社



御祭神 第九十六代 後醍醐天皇
楠正成公 吉水院 宗信公

当社は元吉水院と称し今から凡そ千三百年前、白鳳年間に役行者の創立と伝えるきわめて古い吉野修験宗の僧坊であった。そして明治の初めまで永年の間幾多の歴史を秘めて修験道の勢力と共に発展して来たが明治維新の神仏分離の際（明治八年）神社と改つたものである。
元より当社は南朝の元宮でありここに後醍醐天皇を祭神とし当時天皇の忠臣であった楠正成、吉水院宗信法印を合祀している。次に世に名高い当社の歴史の概要を紹介しよう。

後醍醐天皇南朝の皇居

延元元年（一三三六）京の花山院より免れた後醍醐天皇が吉野に御潜幸になり吉水院宗信の援護のもとに当社を南朝の行宮と定められたのである。

かくて天皇が当社に第一歩を記されてよりかの悲壮な吉野朝四代五十七年に渡る血涙の歴史の第一頁が開かれここに南北朝の対立が始まったのである。天皇はこうしたへき遠の地に憂悶の数年を過されたが、遂に病を得て悲憤の最後を遂げられたのである。即ち当社はその南朝の御本家に当たり現在吉野朝、唯一の行宮である。

源の義経、静御前悲恋の古跡

文治元年（一一八五）源義経は兄頼朝の追手を逃れて静御前、弁慶等と共に吉野に潜入され当社にしばらく亡命されたのであるがそれも束の間追われる者の運命でここから悄然として吉野落をされ奥州へ落延びたのである。

吉野山

峯の白雪踏み分けて
入りにし人の跡ぞ恋しき

と歌われたように当社がいわゆるその天下に名高い義経と静の大口マンスの舞台である。悲運に生きた一代の英雄と佳人との雪路の別れを今に追想するときいに詩的情景であったであろうか、その余りにも美しい悲恋物語は永く後世に伝えられ愛惜されている。今尚保存されている「義経潜居の間」「弁慶思案の間」並びに数々の遺物を見聞きするに際し愛妾一人を残して去った義経の胸の内と夫を一途に慕った静御前の心情とが察せられ一入哀愁が胸を去来するのである。

豊太閤豪華花見の本陣

文禄三年（一五九四）豊太閤が当社を本陣として盛大なる花見の宴を催し数日間滞在されて歌の会、お茶の会、お能の会を開いて豪遊され満天下にその権勢を示したのは有名である。

年月を

心にかけて吉野山
花の盛りを今日見つるかな

一世の英雄がおのが春を謳歌したもので秀吉の豪快なる一面が現われている。
当時の状況は現存する建物並びに数々の寄贈物を見る時南朝の哀史ときわめて対照的で燦爛たる文化が偲ばれ感慨無量なものがある。

吉野歴史の殿堂、古美術の宝庫

この様に歴史的に見ても吉野歴史の大半が集約せられ吉野歴史の中心地として萬葉の花と共に懐旧の情切なるものがあり古来より吉野における幾多の兵火を免れた当社は真に吉野文化を物語る殿堂である。
従って所蔵の文化財頗る多く百二十数点にのぼり吉野随一の宝物を展覧している。しかも内容的に珍宝名宝並びに日本史における重要な根本資料等特に南朝の資料に関しては全国一多く一般に重要文化財の宝庫といわれている。

書院（重要文化財）

この神社が有名になったのはその由緒もさることながら実は現存する書院が日本住宅建築史上最古の位置をしめているからである。
すなわち我が国書院建築史の第一頁に位する本格式の住宅建築で現在日本住宅の源流をなす最古の実例として数々の珍しい手法が見られる初期書院造の代表的傑作である。又、内容的に見ても「義経潜居の間」は室町初期の改築で床棚書院の初期の様式を伝えるきわめて古風な遺構であり「後醍醐天皇玉座」は後年秀吉が花見に際し修理したもので豪華な桃山時代の風格を残した書院でこれら両期時代の特長が比較出来て真に興味深いものがある。

見たしのいとよき所（二目千本）

境内には、中千本・上千本一帯が展望できる「見たしのいとよき所」があり、ここに立って谷から吹き上げる風を頬に感じる時、ふと義経・静御前の悲しき別れや南朝の哀史が聞こえてきそうな気のある詩情豊かな広場があります。又「桃山時代の小庭園」もあり遺跡として、「義経駒つなぎ松跡」「義経馬蹄跡」や「弁慶力釘」がある。